

都市文化の母体



野村良政

<横浜市計画局>

I———文化遺産の再認識

横浜は古都でも城下町でもない。したがってこの都市の遺産のほとんどは新しく、私達とわずか50年か100年と変わらない先人達の残したものである。関外や横浜駅周辺、鶴見、神奈川の埋地にしても古いものではない。

この天然の良港のために、広い背後地を埋立てた機械力もない時代の先人達の努力は大変なものであっただろう。私達は時にはそれを考えてみる必要があるだろう。

その次に関東大震災のもろもろの復興である。市街地の80%、12.89km²を焼失し、全戸数の75%に及ぶ72,400戸という建物を失なった大きな打撃の中から、300万m²以上の復興土地区画整理事業を進め、街路や公園その他各種の復興をやりとげたわけである。自動車もまだ乏しい大正末期に、幅員20m以上もある現在の市街地の幹線街路を縦横につらぬき、また野毛山公園、山下公園、神奈川公園、保土ヶ谷児童遊園地等を私達に残してくれたこの都市の人達の献身と努力と善意は忘れてはならないだろう。

そして最後に、震災の灰燼の中から900万m²に及ぶ震災復興や接収解除地の区画整理を断行してきた労苦と、公共のために乏しい私有の土地をさいて提供した多くの人達のこととも忘れてはならないわけだ。

幅広い50mの国道をはじめ、自動車時代に適応した多くの幹線街路が、それによって整備された。鶴見や東神奈川の駅前を整備し、とくに横浜駅西口を誕生させたことは、どの戦災都市にも見られぬ飛躍的な復興であった。また合計30万m²に及ぶ120余の公園を町々に設置してくれた。これらの善意の人達は、いまなお私達の周りに大部分が健在である。

私達の先人はこれほど数かぎりない大きな文化遺産を残してくれているわけだ。そして私達は現在日々、その恩恵をうけている。太陽や空気のように自由に対価もなくその恩恵を享受して安々としている。そして残念なことに、これら先人達の好意と努力を忘れてははいないだろうか。

横浜の文化という問題を考える時、私は先ず現代の人達に、今のこの町のなりたちを省るだけの情緒がなくてはいけないと思う。そしてそれによって自分達もまた先人の遺産にさらに何かをプラスしてゆこうという善意と努力が生まれてくるのではないかと思う。

私はまたここで三溪園を残した原三溪氏を思わずにはおれない。あの名園を市民に開放した美拳と、近代日本画の巨星菱田春草、安田靫彦、横山大観等に対して、その書生時代に月々100円ずつ現在の10万円以上か>の大金を各人に施して、絵の勉強をさせたという美德は、横浜の人達にもっと認識されなくてはならないだろう。15万m²余に及ぶ三溪園を市民に開放した秀れた先輩をもつ私達が、今日緑の丘を切りひらいて怪しげな宅地を急造し、てのひらほどの土地ぎりぎりに六畳一室の安アパートを乱立してよいのだろうか。

横浜市民には一般に郷土愛や市民意識が乏しいといわれており、これが都市計画の実現を難渋させ、ひいては文化の創造にもブレーキをかけることともなるのだが、その点からも文化遺産がもっと再認識されなければならないと私は思っている。

る。そしてそのためにも、文化遺産についての広報やそれを記念する方法が、もっと活発に行なわれなくてはならないと私は思う。

2———横浜の可能性

さっぱり好転しない住宅事情の中で、そして洋服の袖やボタンの引きちぎられる今の交通地獄の中で、文化もへちまもあるかという反撥もあるだろう。

しかしながら、京浜工業地帯のあの熱気の中から、たくましい職場文化が生まれ、京浜地区の勤労者文化は、様々のジャンルにおいて優秀さを認められてきたことを私は知っている。

横浜の文化は地方文化という型ではなく、首都圏のなかの強力な一拠点として、中央文化の色彩が強いと思われるが、さまざまな地方人の集合体である横浜では、そのさまざまな地方の特性が互いに切磨し合い、同時に中央の息吹きに刺戟されて強く伸びてゆく場合がしばしば見られる。これも横浜のもつ一つの特色であろう。

文化の母体としての都市施設の面ではどうであろうか。確かに現在の大都市は環境が悪いし、悪くなるばかりのように見える一面もある。しかし考えてみれば横浜もようやく道路の舗装率が42%にも達し、今年度末には46%にも達するのだから、これは明らかに日本一であろう。簡易舗装であるにしろ、とにかく舗装率を日本一たらしめるこの強大なエネルギーを、次にはどの方向にそそぎこんでゆくか。中小都市なみといわれている今の都市計画の規模を、どのように充実してゆくか。舗装に比べてかなりの格差をもつ劣勢な部門のうち、将来のために、何を最優先して高めてゆくか。これが都市文化の母体としての、都市計画の課題であろう。

さらにこの町にとくに不足している図書館、美術館、博物館、音楽堂等の精神面の施設も、あわせて促進されなければならない。

しかしながら、エネルギーは総花的に分散され薄められては、大した効果が期せられない。したがって今こそ将来を決する重大な時期に直面しているわけであるが、志向を誤まらない限り横浜の可能性は十分期待できよう。

3———文化の基盤——都市計画

今の横浜には確かにもとの横浜らしい雰囲気はなくなった。

美しい海辺は京浜工業地帯と本牧・根岸湾工業地帯に変じている。しかし私は別段懐古趣味で近代化に不満をもつものではない。内陸地帯の工業化も必要であり、商業港であるとともに工業港への飛躍も必要であることは理解される。都心部の再開発や近郊地帯の開発も必要である。しかしそれらは、同時に都市計画の素朴な理念である《太陽と緑と空間》の確保が成り立つものでなければならぬ。その意味で、公害という問題がいち早く横浜でとくに真けんに取上げられるようになったことは大いに注目してよい。

さらに進んで、都市を一つの作品として、その造形の美化がもっと考えられるべきだと思われる。世界に誇った臨海の山下公園や、新しい港の見える丘公園のすぐ目の前にひろがる、新山下一帯の醜景を再びくり返してほしくない。あの場末の鉄工場のような粗野で俗悪なトタン屋根と塗装には、都市美への配慮の一かけらさえ感じられない。工場にしろビルや住宅にしろ、その効用性と同時に都市美構成の一要素として、造型と色彩にもっと配慮が深められなくてはならないだろう。道路は人や車の通るだけのものではなく、同時に眺める道路であってほしい。

都市計画とは、平たくいえば『誰でも住みたくなる都市づくり』にはかならないのであるが、この大胆素朴な宣言の実践のなかから、横浜の文化が正しく継承され、美しく創造されてゆくと私は思われる。